

大谷知新

石の営みによって生まれた地域資源の再編

石は生きている。

ひとの一生とは比べられないほど長い年月を重ねながら生きている。

大谷石は数ある石の中でも人間的な尺度の時間軸を生き、

ひとの手が加わることで様々な形を経て、ひとにより最期を見届けられる。

そこはかつて石が生まれる場所として「生」

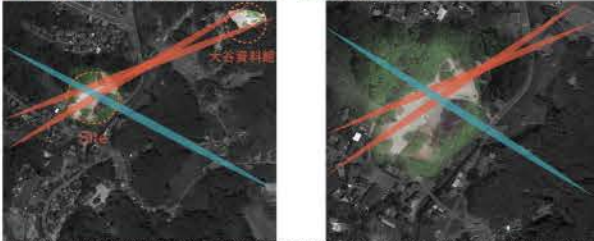
産業遺産となった今、町から取り残されている。

かつての石の潤いは戻らない。

採石場跡地に残り今も生き続ける石の脈動を伝える。



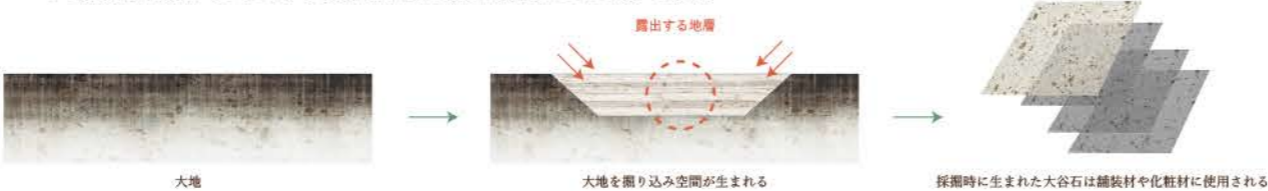
■ 軸線によって創出された形態



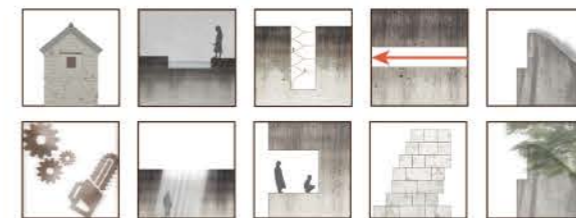
軸線から採石場跡地に建築を貫入させる。大谷資料館に対する軸線から建築の形態を創出することで、資料館の人の流れを呼び込み新たな大谷の覆れを作り出す。岩山を貫く軸線は福寿山を見守ってきた福寿神社の参道に繋がる。かつては1つの山であった岩山同士を結ぶものへと形態を与える。

■ 大地に刻む建築 地層博物館

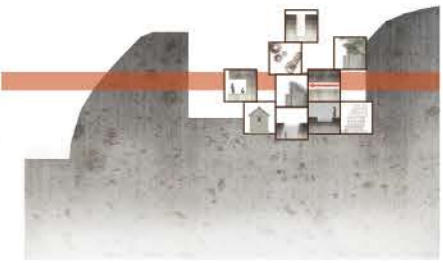
軸線によって生まれた形態に沿って大地を掘り込む。この操作は新たに地層を露出させることで、石の脈動を直接岩肌に触れて体感する空間を生み出す。この博物館が今現在、そしてこれからも大谷は石を採り続ける意思表示とする空間へとなる。



■ 大谷のデザインコード



大谷という大きな力を持った敷地に対してその場所のデザインコードを取り入れることで自然と対峙しながらもその場所に調和する建築へと変化していく。



「再構築」

石と共に時を刻む鋼材

石の時間軸とは異なる時間軸の中で変化するコルテン鋼（耐候性鋼）。

採石場では様々な機械や加工場などが鋼材によってできている。現在その多くが経年変化によって錆ついている。

コルテン鋼を用いることで昔からその場に存在していたかのような装いを与えながらも、時間とともに変化していく姿を石と共に体感できる。



直線の動線から派生する建築空間

大谷の垂直平行な岩の断面から直線的な動線を取り込む。

動線はヒューマンスケールにスケールダウンすることで採石の大きさを強調する。

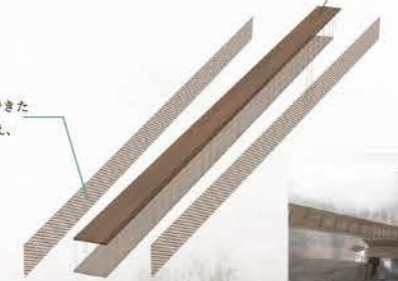


採石によって削られたかつての山の高さを示す塔。
地下採石場へ降りていく立坑のように地下に光が落ちてくる。
上の展望台へは華奢な階段を使って登って行き、大谷を一望する。

岩肌の穴が延長されたチューブ状のブリッジ
横に掘りすすめる垣根場の採石形態を建築に落とし込んだ。
稲荷山を古くから見守る稲荷神社の山道へと続いている。



パンチングメタルを用いることで採石でできた
洞穴の中を進んでいくような体験を与え、
隙間から敷地内を眺める。



埋り込まれた地層が露出する空間に光を落とし込む



大地に刻む建築は眠っている
大地から隆起するように持ち上げることで
空間に変化を与える

ヒューマンスケールを定めた採石場跡地の空間を
ヒューマンスケールで構築された動線空間によって巡っていく



山肌に沿いながらブリッジに続くスロープ

洞穴空間へ続くスロープの内部では
石の加工体験が行われている

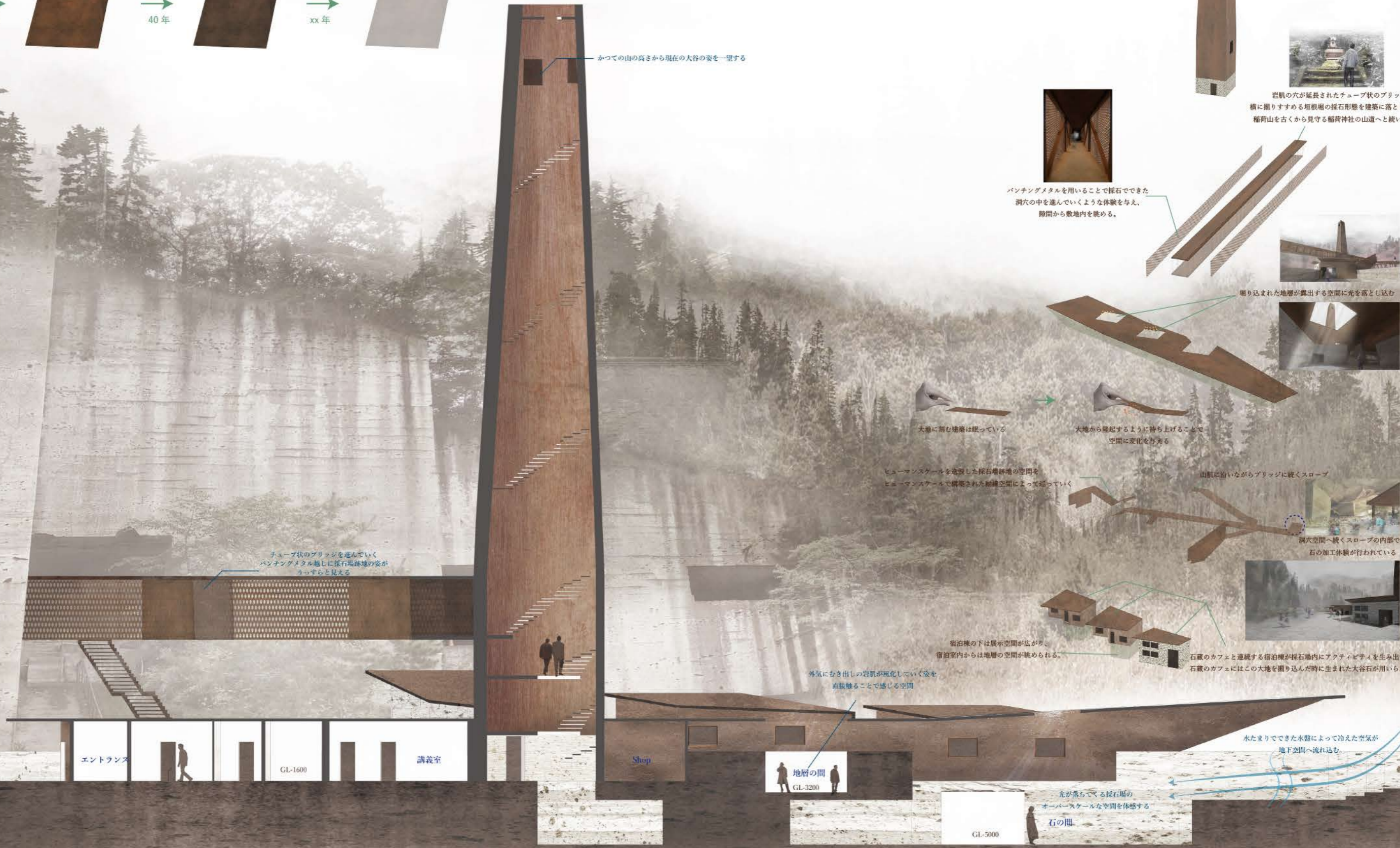


宿泊棟の下は展示空間が広がり、
宿泊室内からは地層の空間が眺められる。

石蔵のカフェと連続する宿泊棟が採石場内にアクティビティを生み出す。
石蔵のカフェにはこの大地を掘り込んだ時に生まれた大谷石が用いられている。

外気に吹き出しの岩肌が風化していく家を
直接触ることで感じる空間

水たまりでできた水盤によって冷えた空気が
地下空間へ流れ込む



エントランス

GL-1600

講義室

Shop

地層の間
GL-3200

石の間
GL-5000

